へ 5
6610
2

911.05
<5
6610
2

BB28
藤

87846

<2000-394>

裏之部

山形の高山に登る紀行

突しらの小村の綾子なる引

松尾乃世界と移りし再丙戌

去年の冬より来武年移りて

動もすくいかるらしし人の

年別を告ることを

枝とうて見ても和月の新雪う
ちうしけて腐の帰日や文衣
深沙のつゝ五年掃き菊の巣
みしらぬと思ふ彩之雪松川
多もいたらつきうきるワの我弘
撫衣て旅人出る為葉の孔
明失年一時くれうの月かき哉
嘆哦乃大無寂まて

一日乃仏を拭ふ事の禁孔
妻峰ら家の庭まて
若楓人まうふうのそよ紀ら家
鐘供養海ふ京れう事か楓
家庭ら思ふ日もあう家楓
古井れら人の訪きてワの楓
若楓年時年月の伝ら戦孔
三日月のちまうふきる杉樹弘

ものをしらする神垣の新樹哉
世をうのあれ小村の竹掛弘
春雨や小瀬のきとく蛙鳴
蓮仏や蟬の一年常住
霜とうも白紙を貼るの一重葉
墨縄の墨ゝ付けを作りの花
道そうや一反作る年歩る数
塵の未てうしする付けの一重葉

けし花春下水の年をとる
なるまゝ咲るも咲すまして春子の色
うれしのうるる年うまうまうの花
猶そつく寄て咲けり歩る竹葉
古傳を苦年歩る庵の牡丹哉
春の百二丁ゟ至て牡丹ゟ
ほつちりと歩る牡丹の一重下
庵沢や一輪咲ゆる牡丹

[illegible]
[illegible]の花を咲かり 杜鵑
枝木をゆのつゝみ中をかまつる
山ゝけや咲もほとゝす 杜鵑
ゝまつりゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]松の枝ゝ
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]垣の梅
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の月おれ
[illegible]の郭公
[illegible]の大きゝや[illegible]
時ゝ[illegible]神 乃る

一嵐雪まうでや江の和とき沢
時雨時雨や東海の時雨しと
おもふき寺の霜年四方の東海道
降雪の夜の偶ふ深と沢
杜鵑なくや楓の花ふ盛ふ
浄土ふして蕭素ふや郭公
耐ふ常和の母をおもふ人ふ
蕭つき尽き尽年時無

命那麦子花世のふう杜宇
踏分し蕨の自然や知ふ知寸
ふ子の深ふや京二年郭公
習祝中ふ有へき猪のすがら
そのあふ和年似ふ時ふ
扶引て無言のふ此深ふき寺
雨を出てしやすや入日の杜宇
不用ふ示出て猪帰一時ふ

もとより却て陸ふる所の物
遠ふけて時々大雨の泪と紀度
時々おしこみて言辛抱
人の行儒ちいさく聞て孫子多
度なる故障の夕見孫子と
孫子島嶋々拾弟の時返し
ものこと子ふ子紀貴の身
日の内を八百ふ居ふ所ふ閑子多

庄里七年者多年一四人子と
者家を七ふ嶋て孫子多
ひとりして寸山を嶋閑ふを
草もふ小家義又て嶋多弱
紀貴の志風れまは水弱
子の戸杜油をふらす水弱々
いさふ孔子於のこの物孔
竹をとふ年家のこもより杜多弱

花のうの学び歩りう水鶏の声
草の戸に住捨て旅の日数もすぐるに
艸庵のあるじ
変はれとも水鶏少なくなれり
変はれとも水鶏少なくなれり
世をのがれて瓢井戸年住りる
深川夫婦を笑しして
そら豆の花年服のつく住居
故持や画つくり人を画てくる

所はとりをゆふいて白る故き我
夕くれい故年浮世めく住居れ
故き七年并て竹也一株刹
然ある故き年月雪の跡迄
旅人の暑て扇ふかせるなる
然あや蕉年を紀尾の敗屋
升の子や牡丹年の片家いなし
若竹の葉ち片く月の光をれ

まゝ梅や月の影かりもなきかの紀
宗祇もや淵てふ名所面白き
あちきあや淵知てゆる淵の上
宗陽花や作山るとて折すなる
宗陽宗長同一色紙波山
ゆもちあや毋る色紙元亨和
石合切て并へんて折るや草カヒ
宗長一紙元度の集如基ゆ

色香なる紀支殿の中ゆき新編
持の未や懐のうへ持書うらす
松の影ちきねを葉小葉年月り
けし新あるこの名称の新使
五月雨の芦原も新や芦火焚
けうこれや月すれて春し淡路島
きみ平きや梅きま鶯山乃家
五月雨や抜ま紀碑の宿

早乙女に顔ふ詞もやさしへし
さてしおらゝんや田植の初あらさ
木からるれて狭なかりし狭田の茨
一里ほと先からみえて桐の花
枝條の漏来まてのかゝる鶯かな
二股のさらえるや浮巣のはつかなる
流れ来るはくさ手窄く浮巣哉
山風やみさとをらる鵜のかゝ里

竹林風中のて出て来る鵜舟哉
落来るやむしの松無の鵜の舞
の辻あのゝし見る青田かれ
山本石霧子に移孫を孫して
切たのれる青田の井也宮氣色
立報蝉や浪戸の猫屋根戻りけり
きゝ帰や心手違まれとし給り
清瀧や笈のやゝれる蝉の聲

旅人の木ゝけ掃ける蟬の声
裸足や雨をしたゝる畦歩き
大ゝのひゝくや川ゝもたゝもたゝ
江戸ゝもれしすゝぶるの雨哉
つゝの尾ゝ雨あり大ゝるを
たゝらに冠者よしゝるを笑ふ
冠者を頭て花ゝ枝をを
あゝす

山ゝもあゝゝりて雨雲を
麻うけをしたゝる清水哉
里人のたゝ用ゝ通るたゝつゝ
登蕨れ花ゝ破の猫ゝ形
ゝゝゝかゝ一畳つゝや米元脚
少雨やすれのゝ花ゝゝ
ゆゝの夏やゝ白ゝ一ッ
中ゝ新のゝゝ今ゝ煙ゝ

凌霄や瓦なほ川を流る日々
かしこ年ゆくゆくの蓮
日盛りや蟬ひきつる蟬乃多
六月や待る多き昼の夜
松の葉枯るまく梅る火串哉
暑ーのせて牌ーく一枚沼
後のけて蟬ゆくる蓮見なる
寄をくに合ゆく蓮の玉

さむらの中蓮見の小服哉
志ほかきとの喰ひ蓮見哉
夜の月むけと蓮る種面乳
已ゝ戸ゝ面の命て蓮の納涼なる
白く水の四条ゆくすゝ蓮
ゆくゝお掃ていまる納涼哉
蓮くて来てさむらのすみ哉
涼しさや蓮ゆる頃ゆら

すゝしけやくゝ百年松脂のつくゝ夕
涼しさや雀も去る夏梅の木
きゝしけやくゝ庫裏一本を孔てゐる
涼しさくゝ付る門田哉
すゝしけや根毎年牛もつれくゝて
葉先なる水年於て蓮池
大はゞ梅林まて
梅さくゝ涼し木の目よはあをえて

異土貞や時汐る潮も形しすゝる
あつ紀見やふつとえてのくる扉風の画
根葉を紀人をとゝやむはつき孔
はゞ時貞や枝踏る玉掃すす
ち井千脇すをてゐる暑う孔
芋は葉や はつき井まも脇のとゝ
樹千ものは咲ゝくくくも花峯
ちゝ徳のちゝ見えて雲の峰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

湖辺

唐崎か松くいほどなる妻の社

先師の十七回忌を営むとき

一枝の花はなけれども手向て一炷の

香は煙ばかりなる

妻萍の心ばかりなる香炉

同二十五回忌

あるじくるとも孫子のうへまで立月集

同三十三回忌